

清内府蔵本『増廣註釋音辯唐柳先生集』考 —天禄琳琅蔵本・四庫全書本・清学部図書館蔵本とその行方—

戸崎 哲彦

はじめに

『増廣註釋音辯唐柳先生集』(以下、音辯本と略称)は宋・元、さらに明の間に繰り返し覆刻・重修されており、恐らく『柳集』諸本の中でその回数は最も多い。巻数からいえば、正集四十五巻本・四十三巻本・二十巻本が、版式からいえば半葉12行・行21字本、13行・23字本、9行・18字本、13行・26字本という全く異なるに系統に分けられる。その中で四十五巻本は12行本であるが、四十三巻本にはそれと13行本がある。前稿では四十五巻本の現存を報告するとともにそれが南宋原刻本であることを考証し、さらにその特徴について考察を加えたが¹、問題となるのは四十五巻12行本と四十三巻12行本と四十三巻13行本との関係である。清人以来それらはどのように鑑定されてきたのか、また四十三巻12行本は今日に伝存するのか。それらを俟って諸本を比較し、系統づけるべく、本稿では先ず清朝内府蔵本についてその特徴・鑑定・存否を中心にして見てゆく。

I 清朝内府蔵音辯本とその宋元刊本の行方

かつて清朝内府には『柳集』の諸本が蔵せられていたが、その中では音辯本が最も多かった。于敏中等『欽定天禄琳琅書目』には宋版一部、元版三部、明版三部を、彭元瑞等『欽定天禄琳琅書目後編』には宋版四部、元版二部、明版一部の計14部を著録するが、宋版一部(五百家註本)と明版を除く9部が音辯本であり²、しかもそれらの宋版・元版はいずれも版が異なるという。その著

¹ 「南宋淳祐九年劉欽序劉怡堂輯註『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十五巻12行本考」(『島大言語文化』33、2012年)。

² 明版は『韓柳全集』二部の他に『柳文』(四十三巻)、「別集」二巻、「外集」二巻、「附録」一巻。前唐劉禹錫序「卷一標題下漫署「禹錫」之名」一部と濟美堂本『河東先生集』一部。前者は正集43巻であるから音辯本の系統。

録内容と鑑定は『欽定四庫全書總目』の提要と共に後人にしばしば引用され、それとの異同を比較して時代判定するなど、影響は小さくない³。

『天祿琳琅書目』・『後編』の著録

乾隆九年(1744)、高宗(1736-1795)の御覧に供すべく内府蔵書中から天下の孤本稀書が厳選された。それらは昭仁殿に集められて「天祿琳琅」と名付けられた。乾隆四〇年に完成した『天祿琳琅書目』巻6「元版集部」⁴に次の三部の音辯本が著録されている。以下、諸本の間には文字の異同が多く、校勘するためにも、全文を掲げる。

『増廣註釋音辯唐柳先生集』 一函，八冊。

唐・柳宗元著，〔宋〕童宗說音註，張敦頤音辨，潘緯增廣音義⁵。『正集』四十三卷，『別集』二卷，『外集』二卷，『附録』一卷，共四十八卷。前〔有〕⁶唐・劉禹錫原「序」、宋・陸之淵「序」並「編集〔諸賢〕⁷姓氏」。陸之淵「序」……陸之淵無考。是書亦係翻刻宋本。字畫猶存其概，而紙質墨香則不相侔矣。

明・晉莊王鍾鉉藏本。鍾鉉見前。(以下は藏書印、省略)

『増廣註釋音辯唐柳先生集』 一函，五冊。

篇目同前，闕「編集〔諸賢〕姓氏」。

前書於『正集』外，雖分『別集』、『外集』、『附録』，而「目錄」則同列於『正集』之首，此本以末五卷〔「目錄」〕⁸移置『別集』之前。版

3 李常慶『「四庫全書」出版研究』(中州古籍出版社2008年)『「四庫全書總目提要」的影響』(p70)、劉薈『天祿琳琅研究』(北京大学出版社2012年)『天祿琳琅』對後世版本書目之影響』(p294、p298)に詳しい。

4 台湾・広文書局1968年影印、26b-27b (p476-p478)。『中國歷代書目題跋叢書』(上海古籍出版社2007年)第2輯所收(徐德明「整理說明」p2に「以王先謙刊本為底本」)、p186-p188。四庫全書文淵閣本(台湾商務印書館『景印文淵閣四庫全書』675)p469。

5 『四庫總目』や四庫各閣本「提要」には「舊本題“宋童宗說注釋，張敦頤音辨，潘緯音義」といひ、また各閣本の正集巻1葉1に「宋童宗說、張敦頤、潘緯音釋」というように、「宋」は「童宗說」の前にあるべきもの。『四庫總目』等は「音註」を「注釋」作るが、宋本巻首の「諸賢姓氏」には「童宗說音註」とある。

6 『天祿琳琅書目後編』巻1『御題増廣註釋音辯唐柳先生集』に「前有乾道三年陸之淵「音義序」、諸家〔賢〕姓氏、「年譜」というように「有」字のある方が文意明確。

7 宋本巻首の「……集諸賢姓氏」に作る。

8 「末五卷」とは『別集』上下巻、『外集』上下巻、『附録』1巻を指すが、それを「移置『別集』之前」では意味不明。文淵閣本には「目錄」二字がある。音辯本には正集以外の目錄を正集の後、別集の前に置く一本もあり、それを指す。徐德明整理本(p187)は「以王先謙刊本為底本，『書目』校以文淵閣『四庫全書・天祿琳琅書目』及他書」(p2)としながら校勘に重大な遺漏がある。

式雖仿前書，而實別為刊梓。撫印之工，又出其下也。

明・毘陵周氏藏本。良金印已見前。吳蒙印記，無考。(藏書印)

『增廣註釋音辨唐柳先生集』 一函，十三冊。

篇目同前，闕『別集』、『外集』、『附錄』、『目錄』。

此本較第二部，又遜一籌。合觀三書，皆非一版。何開雕者如是之多，而顧草草以從事耶。

鄭翼明收藏印記，無考。(藏書印)

これらの音辯本はいずれも 43 卷本である。三部とも同版ではないとするが、版式も示されておらず、元刊本であることの根拠は不明であり、また「是書亦係翻刻宋本」という「宋本」も指す所を知らない。音辯本の「宋本」なるものは『天祿琳琅書目』に著録されておらず、入蔵していなかったはずである。「翻刻宋本」は推測に過ぎない。

その後、仁宗 (1796-1820) 嘉慶二年 (1797) 十月二一日、乾清宮で失火し、一墻を隔てていた昭仁殿に延焼して天祿琳琅の蔵書は全て灰燼と化した⁹。そこで全国から再び宮中珍藏の善本が回収され、三年夏に『欽定天祿琳琅書目後編』が完成した。その巻 1 「宋版首部」¹⁰ によれば先に焼失した元版よりも更に古い宋版が、しかも四部も存在したという。今、A・B・C 等を以って区別する。

『御題增廣註釋音辨唐柳先生集』 四函，三十二冊。……【A】

唐柳宗元撰，宋童宗說注釋，張敦頤音辨，潘緯音義。『正集』四十三卷、『別集』二卷、『外集』二卷，『附錄』：劉禹錫「天論」、「祭文」三首、『唐書』本傳、曹輔、黃翰、許尹「祭文」、汪藻「祠堂記」、穆修「舊本後序」、沈晦「四明新本後序」、李禔「柳州舊本後序」、文安禮「年譜後序」。前有乾道三年陸之淵「音義序」、「諸家 [賢] 姓氏」、「年譜」。

宋麻沙本。按：『柳集』在宋凡六刻：一穆修宋大字本為最初，後多承用；一元符小字本；一曾丞相家本；一晏元獻家本；一四明新本，政和四年沈晦刻；一柳州舊本，紹興四年李禔刻。與此本而七。今通行乃明鑄，卷帙音注皆照此本，而舛誤特甚。此雖未知較北宋四刻及南渡後二刻為何如，而

⁹ 施廷鏞「天祿琳琅查存書目」(『圖書館學季刊』中華圖書館協會編印、民國一五年 1926) 第 1 卷第 3 期) の「敘言」p 481。

¹⁰ 台湾・広文書局 1968 年影印王先謙合刻本、17 b、p 946-p 950。『中國歷代書目題跋叢書』(上海古籍出版社 2007 年) 第 2 輯所收、p 395。

精密足寶。童宗說，字夢弼……；潘緯，……為灤山學官。注中白文，童、張、潘，並作“某云”，非緯所自刻。然較其闕筆字，的是南宋中葉本。御題『増廣注〔註〕釋音辨唐柳先生〔宗元〕集』¹¹：“文章韓柳稱伯仲……惜其末路鮮周旋。癸卯仲夏御筆。”鈐寶二：曰「古稀天子之寶」，曰「猶日孜孜」；上鈐寶二：曰「乾隆御覽之寶」，曰「古希天子」。

印記與『韓集』多同，蓋以麻沙本相配也。其「朱季子」，或即朱家賓。「沛國郡/圖書印」朱文，首冊。「松菊/閒情」朱文，首冊，……。[大/經]朱文，首冊，……外集七[上]。「吳越/王孫」朱文，首冊，二冊，卷一。「朱/季子」白文，卷首。「朱氏/祕玩」朱文，卷一，……附錄。「諸西/崖書/畫印」朱文，卷二。「子二孫二/永保/用享」朱文，卷二，……附錄。「慈雲/樓」白文，卷八，……卷四十三。「西崖/諸氏/家藏」朱文，卷十二……別集。「季/□」白文，卷八、卷十七、附錄。「由拳/壺盧式」朱文，卷二十四。闕補卷二十二 九。

まず、著録の自明な誤りを指摘しておく。「在宋凡六刻」「北宋四刻及南渡後二刻」の六刻の内、「北宋四刻」とは「穆修宋大字本」・「元符小字本」・「曾丞相家本」・「晏元獻家本」を指すから「南渡後二刻」とは残りの「四明新本」・「柳州舊本」ということになるが、「四明新本」は「政和四年(1114)沈晦刻」の北宋刻であるから、「北宋四刻」の「四」は「五」に作るべきである。この部分の記述は『天祿琳琅』の特徴である「梳理版本系統」を示す好例と見做す説があるが¹²、じつはこの段の「穆修宋大字本」等の「北宋四刻」とはそのまま「沈晦「四明新本後序」に「凡四本」として列挙する所であり、これを無批判に援用したために誤った。なお、『柳集』在宋凡六刻」と「與此本而七」としているが、北宋と「南渡後」南宋で刊刻された柳集は七種に止まらず、優に十種を超える。これについては別稿に譲る。

この書の構成と編次は、『正集』四十三卷、『別集』二卷」であること除けば、前稿で考察した淳祐九年劉欽序の正集45巻本と基本的に同じ。具体的には、たしかに45巻本にも「童宗說注釋，張敦頤音辨，潘緯音義」が巻1首行後に三行を占めて標榜されており、巻首に「前有乾道三年陸之淵「音義序」、諸

¹¹ 現存本は「題『増廣註釋音辨唐柳宗元集』」に作る。

¹² 劉蕃『天祿琳琅研究』(p.370)に「梳理版本系統」の第一例として『御題増廣註釋音辨唐柳先生集』のこの段を引き、「為後世追尋柳集在宋代的流傳情況提供了很多線索」というのは誤り。

家〔賢〕姓氏〕、「年譜」があるが、45巻本では冒頭に劉禹錫「集序」があって陸之淵「柳文音義」、後に潘緯『柳文音義』の自序、さらに劉欽「後序」となっている。『後編』の著録が精確であるならば、劉・潘・劉の三「序」が欠けて陸「序」のみがあったのであり、それはこの書が陸之淵によるもの、あるいは陸本を底本としていることを印象づける。また、「諸家姓氏」の「家」は45巻本・43巻本を問わず、「賢」¹³に作る。清臣の鈔本あるいは王先謙刊本の単なる誤字であろう。次に、文安礼『柳先生年譜』の後には「目録」があり、45巻本とは違って『正集』四十三卷、『別集』二卷に分けられ、その後には『外集』二卷があり、さらに後には「附録」一卷があって確かに「劉禹錫「天論」、「祭文」三首、『唐書』本傳……文安禮「年譜後序」」が収められているが、45巻本には劉「祭文」三首の前にさらに皇甫湜「祭柳柳州文」がある。また編次もやや異なり、宋祁「『唐書』本傳」は劉「天論」の後に置かれている。現存する45巻本は刊本・鈔本とも巻首「目録」と書中の編次が一致するから錯簡乱丁の類ではない。

この書は『後編』の「宋版首部」つまり昭仁殿延焼後に収集された天禄琳琅続蔵中で乾隆帝御覧の宝と称せられる、わずか九本中の貴重な一本であるが、巻6「宋版集部」には宋版を三部も掲げている。

『増廣注釋音辯唐柳先生集』 二函，二十冊。 ……【B】

同前「首部」“麻沙小字本”，係一版摹印。

「晃/□」朱文，卷首。「思/彦」白文，卷首。「古吳/蔣/氏藏」朱文，卷首。

「能奉/名家」朱文，卷五、卷九、卷二十九、卷四十二。「浮清/堂/珍藏」白文，卷末。

『増廣注釋音辯唐柳先生集』 一函，四冊。 ……【C】

篇目同前「首部」，亦“麻沙小字本”，而尺寸微豐，字畫較展，無「年譜」，乃另一刻。

「芝秀/堂」朱文，卷首。「夢/原」白文，卷首、卷上〔五〕、卷二十六。「項/惠/□」白文，卷首、……卷二十六。「君畫」朱文，卷首。「黃/中氏」白文，卷首。「睿/謨」朱文，卷一。「睿謨」白文，卷三。「項印/睿謨」白文，卷二十六。

『増廣注釋音辯唐柳先生集』 一函，七冊。 ……【D】

13 明刊本の一部は異体字「賢」。

篇目同前「首部」、亦“麻沙小字”、“另一刻”。

鑑定によれば宋刻麻沙小字本には少なくとも4種類があった。「篇目同前『首部』」であるから、いずれも43巻本である。この中でA・Bの關係は極めて近いが、Cは『年譜』が欠落していたとしても、「尺寸微豊、字畫較展」であって異なる。これらを宋版と鑑定した根拠は「篇目同前『首部』」や麻沙本の紙質だけではなく、Aについて「其闕筆字、的是南宋中葉本」というから、B以下についても闕筆は特徴の一つとして考慮されていたと見るべきであろう。ただし函冊数から見て、また下に掲げる天祿琳琅内での配架状態から見て、「首部」の一部以外は完本ではなかったと思われる。

この他、『天祿琳琅書目後編』卷11「元版集部」には次の二部を著録する。

『増廣註釋音辨唐柳先生集』 二函、十六冊。 ……【E】

篇目同前「宋版首部」。

「宮九/氏」白文、卷首。「高印/登雲」朱文、卷首。

『増廣註釋音辨唐柳先生集』 二函、十二冊。 ……【F】

同上、係一版篆印。惟陸之淵「序」佚。

「桐樹/□□」朱文、卷一。

『後編』の順は「嘉慶年間に内府によって作成」¹⁴された「天祿琳琅排架圖」¹⁵に合致しており、それぞれ次の通りである。「圖」は書名と函数と配架位置および面積を示している。

前層 15 架、寛 3.65 尺、深 1.3 尺； 後層 20 架、寛 3.35 尺、深 1.5 尺。每架 5 層、通高 6.85 尺。					p 5	
A	4 函	前層第 一架 (東南起)	第 1 層	最左		p 12
B	2 函		第 2 層	最右		
C	1 函	中右		上上	p 19	
D	1 函			上下		
E	2 函	前層第十五架	第 5 層	中左	上	p 19
F	2 函				下	

面積ではA・B各一部が最も広く、E・F二部でその半分、C・D二部ではさらにその半分、つまりAの1/4を占める。

¹⁴ 劉蕃『天祿琳琅研究』(p 51)。

¹⁵ 北平故宮博物院印行『故宮圖書及內務檔案史料』(煮雨山房編、広陵書社 2008年影印) 第1巻『天祿琳琅四庫書要排架圖』(民國二二年影印)「天祿琳琅排架圖」。

これら天禄琳琅続蔵の宋版43巻本四部および元版二部は、民国期における日中関係のうねりの中で分散することになるが、幸いにも今日に現存する。

溥儀による天禄琳琅蔵本の搬出

宣統十四年（民国十一年1922）、後に満洲国皇帝に担ぎあげられる溥儀（1906–1967）は、弟溥傑（1907–1994）に賞与するという口実で天禄琳琅から膨大な数の書籍絵画を持ち出させた。後日その当時の目録が養心殿で発見され、今日に伝わっている。その中に『柳集』が記されているが、奇妙なことに搬出と受領の間、さらにそれらと残留の記録との間に不一致が見られる。まず、溥儀搬出の目録には次のものが記されている¹⁶。

「賞溥傑書畫目」：

八月初七日賞溥傑 宋板唐柳先生集 二套 = [B]

九月二十五日賞溥傑 元板増廣註釋音辨唐柳先生集 一部二套 = [E]

「收到書畫目錄」：

十月初六日收到 宋板唐柳先生文集 全函 = [B]

初九日 元板唐柳先生集 二函 = [E]

二十三日 宋板増廣註釋音辨唐柳先生集 二函 = [D?]

「收到書畫目錄」の「元板唐柳先生集」と「宋板増廣註釋音辨唐柳先生集」の「元」・「宋」が誤って転倒している可能性があるとしても、受領したものの方が一部多い。「套」と「函」の単位は「賞溥傑書畫目」と「收到書畫目錄」の他の用例に照らして同じであり、前者では「套」が、後者では「函」が用いられている。『後編』によれば天禄琳琅所蔵「唐柳先生集」は「宋版」が四部、「元版」が二部、すべて音辯本であった。したがって「宋板唐柳先生文集」・「元板唐柳先生集」も「宋板増廣註釋音辨唐柳先生集」・「元板増廣註釋音辨唐柳先生集」と同じ音辯本であり、両目録を整合させれば「賞溥傑書畫目」で「宋板増廣註釋音辨唐柳先生集二套」一部が欠落している、あるいは「二部」二字が脱落しているか、「收到書畫目錄」で「宋板」が一部重複していると考えねばならない。

¹⁶ 『故宮已佚書籍書畫目錄四種』（『歴代書畫録續編』第5冊、国家図書館出版社2010年影印国立北平故宮博物院1934年鉛印本）「賞溥傑書畫目」2a（p294）、3b、4a（p299）、「收到書畫目錄」27a（p343）、29b（p348）。現物の写真4枚を掲げる。

¹⁷ 清室善後委員会編印『故宮物品點查報告』（民国一四年至一九九年）「第一編第三冊：昭仁殿弘德殿端凝殿物品目錄」「卷一：昭仁殿」p93・p111。2004年綾装書局影印本第一輯（p328、p347）に拠る。

溥儀が搬出させた書画は、天津の英国租界に一時置かれ、その間に一部が売却されたが、大同元年（民国二年 1932）に日本軍によって傀儡の満洲国が建てられると、三年に新京（長春）に運ばれ、宮殿に蔵される。いっぽう搬出後の民国十三年（1924）十月、馮玉祥によるクーデター（北京政変）によって廢帝溥儀が紫禁城から追放されると、民国政府は清室前後委員会を組織して宮中文物の管理を開始し、十四年十月に故宮博物院を設立した。昭仁殿蔵書の調査は十四年二月から三月にかけて行われ、その点検調査報告である『故宮物品點查報告』¹⁷の「昭仁殿物品目錄」には次の『柳集』二部が見える。

- 〔日字〕 三〇六 木書架 一個
 1 唐柳先生集 二函 = 【F】
 （十二本、元本）
- 〔日字〕 三二〇 木書架 一個
 11 増廣注解音 唐柳先生集 三十冊 = 【A】
 （四函、宋版乾道本、乾隆御題）

日字 320 番の物件である木製書架一台には計 20 種の書が置かれており、その 11 番目は「乾隆御題」であることから『後編』A と断定してよい。書名「増廣注解音」の「解」は「釋」の誤字、また「音」と「唐柳先生集」の間には「辨/辯」一字を缺く。「乾道本」とは『後編』A に「宋版」とあり、かつ巻首「乾隆御題」の陸之淵「柳文音義序」に「乾道三年……陸之淵書」とあるのに拠った誤り。ただ 30 冊 4 函のみは、誤りがなければ、2 冊を缺いて一致しない。いっぽう 306 番の書架（計 41 種）中の『唐柳先生集』は元刊本 12 冊 2 函であることから『後編』F、つまり巻 11「元版集部」の『増廣註釋音辨唐柳先生集』に合致する。調査によれば『後編』と「天祿琳琅排架圖」に見える宋元六部中二部には存在しなかった。

しかし、その直後、故宮博物院の図書の整理に当たった清室前後委員会顧問の施廷鏞（1893–1983）は天祿琳琅蔵書の存否を調査しており、その「天祿琳琅查存書目」¹⁸によれば次の『柳集』の存在を確認している。

- 宋版首部 御題増廣註釋音辨唐柳先生集正集四三卷別集二卷外集二卷附錄
 一卷 ……三〇冊 見續卷一、第一七至一九葉 = 【A】

¹⁸ 『圖書館學季刊』（中華圖書館協會編印、民国一五年 1926）第 1 卷第 3 期「天祿琳琅查存書目」p 483、p 489。

元版集部	増廣注釋音辨唐柳先生集正集四三卷別集二卷外集二卷附錄		
一卷	……一六冊	見續卷一一，第四葉	= 【?】
		増廣注釋音辨唐柳先生集正集四三卷別集二卷外集二卷附錄	
一卷	……一二冊	見續卷一一，第四葉	= 【F】

「昭仁殿物品目録」に記録する書架上の書籍は「天祿琳琅排架圖」中の配置に合致せず¹⁹、また施廷鏞「故宮圖書記」²⁰によれば、殿内の物品は後部に集めて置かれていたようである。現存書籍は施氏が『後編』と「天祿琳琅排架圖」の記載と照合したことによって『故宮物品點查報告』よりも明白になっているが、この記録にも不可解な点がある。「續卷一一」つまり『後編』巻11に著録の元版は計二部であり、「賞溥傑書畫目」等によれば一部のみが持ち出されたはずであるが、「天祿琳琅查存書目」によれば二部とも現存していたことになる。

そもそも「賞溥傑書畫目」で試算してみれば、持ち出された書籍は計213部、うち元版はわずかに10部、他は宋版と若干の翻宋版・影宋鈔本である。つまり貴重な宋版を中心に持ち出したことが窺える。天祿琳琅蔵の「宋版」の「唐柳先生集」は計4部であり、他にも宋版が存在していたならば、それらを揃いで元版の方を持ち去ったとは、情理の上からも考えにくい。ならば「賞溥傑書畫目」等という「元板」が「宋板」の誤りである疑いも払拭できない。

しかし、「查存書目」はその後の記録とも異なる。民国一八年に故宮博物院図書館館長傅增湘(1872-1949)編『故宮善本書影初編』(宋元本47種)が、二一年に多くその中から貴重本を選んで故宮博物院編『天祿琳琅叢書』第一集(15種28冊)が影印されるが、共に『柳集』を入れていない。この間、民国二〇年(1931)に満洲事変が勃発し、北京の善本は分散消失を避けるべく、二二年に荷造りされ、二三年に上海租界に避難、さらに南京から重慶等の地を廻って三六年に南京に回送、三七年末に大半が台湾に渡る。その時の記録「北平故宮博物院圖書館南遷書籍清冊」(民国二二年三月)²¹には『柳集』では次のものが記載されている。

善字第一箱：宋麻沙本増廣注釋音辨唐柳先生集：三十冊 = 【A】

¹⁹ 「昭仁殿物品目録」の木書架78~81と303~313が「天祿琳琅排架圖」の前層15架に、82~92と314~322が後層20架に当たると思われる。

²⁰ 『圖書館學季刊』1巻1期(民国一五年)「故宮圖書記」に「所有本殿陳設品、均置於殿後」p55。

²¹ 『故宮圖書及内務檔案史料』第2巻「第二批」p259、p262。

善字第八箱：元麻沙坊刊本註釋音辯唐柳先生集：十二冊 = [F]
 又一部元覆宋本： 十六冊 = [?]

この三部は先の「査存書目」にいう「宋版首部」の30冊本および「元版集部」の12冊本と16冊本に相当するが、恐らく施氏の調査には誤りがあった。再点検された張允亮(1889-1952)『故宮善本書目』(民国二三年一月)²²によれば次のものが著録されている。

「天祿琳琅現存書目」

宋版首部 後編一

御題増廣註釋音辯唐柳先生集：四函三十二冊

……正集四十三卷，別集二卷，外集二卷

……闕外集二卷，存三十冊

= [A]

元版集部 後編十一

増廣註釋音辯唐柳先生集：二函十二冊 第二帙

……正集四十三卷，別集二卷，外集二卷

= [F]

「天祿琳琅録外書目」

元版集部

増廣註釋音辯唐柳先生集四十三卷，別集二卷，外集二卷：十六冊 = [?]

三部の現存確認は「天祿琳琅査存書目」・「南遷書籍清冊」と同じであるが、元版16冊本の方は「天祿琳琅」からその「録外」に訂正されている。「録外」とは「或當時檢擇所未及，或後編既成而後進」²³の書である。この書は後に台湾に移っていた。

今、故宮博物院蔵本に2函16冊「清宮舊藏」(#13834、故善002172-002187)「四十三卷，別集二卷，外集二卷，附録一卷」があり²⁴、これが「天祿琳琅録外書目」にいう16冊本に違いない。ちなみに『後編』Eならば巻首に「宮九/氏」・「高印/登雲」の印記があるはずであるが、この故宮蔵本は「天祿琳琅録外」であるから、それら及び乾隆帝の玉璽や「天祿繼鑑」が無いのは当然であるが、印記の類は全巻に互って皆無である。これはマイクロフィルムによる知見であ

²² 煮雨山房輯『故宮藏書目錄彙編(上)』(線裝書局2004年)所収民国二三年故宮博物院排印本、「故宮善本書目第一」1a(p559)、13a(p583)、「故宮善本書目第二」10b(p668)。

²³ 『故宮善本書目』巻首張允亮識1a(p555)。

²⁴ 故宮博物院編印『國立故宮博物院善本舊籍總目(下)』(1983年)p1025、「國立故宮博物院善本古籍資料庫」(<http://npmhost.npm.gov.tw/ttscgi/ttswebrrb?@1:1123762564:3:3:32@@F18347F02475C82219F4#BOT>)。

るが、実物を精査された書志学の大家阿部隆一（1917-1983）は「又一六冊」〔南庫原藏。後補藍色絹表紙〕²⁵とする。それは清宮南庫物品の調査報告（民国一四年）²⁶にいう

二四二 柳宗元集 二函

（十六本，原註：宋乾道三年。）

に拠るであろう。「原註」は先の「昭仁殿物品目録」の「宋版乾道本」と同じく巻首の陸之淵「序」に基づいたもの。「査存書目」は印記等の確認もせず、ただ「十六冊」本であったために『後編』Eと誤認したのである。

そこで『後編』にいう「元版」音辯本は一部しか北京に残存していなかった。そうならば他の一部は溥儀によって持ち出された可能性があり、「元板増廣注釋音辨唐柳先生集」＝「元板唐柳先生集」がそれに当たることも考えられる。つまり「元板」は必ずしも「宋板」の誤りはない。では持ち出された「宋板」は何部であり、『後編』に著録中の孰れであろうか。

天祿琳琅藏音辯本の所在

今日、これら天祿琳琅藏音辯本は北京図書館（現国家図書館古籍館、旧文津閣）等に、また台湾の故宮博物院に蔵されている。

1：【A】＝1）故宮博物院# 13833（故善 002016-002045）²⁷：

四十三卷，外集二卷，年譜一卷，附録一卷。

三十冊。元建陽書坊刊本。清宮舊藏。

現蔵本は乾隆帝の御題文を書頭に附綴し、「乾隆御覽之寶」・「天祿琳琅」・「天祿繼鑑」や「沛國郡圖書印」・「由拳」等の印記を有しており、これが『後編』巻1「宋版首部」Aにいう『御題増廣注釋音辨唐柳先生集』であることはつとに広く知られている。ただ「別集」二巻が欠落している²⁸。

「乾隆御覽之寶」・「天祿琳琅」を有するものは乾隆帝の昭仁殿天祿琳琅藏書

²⁵ 阿部隆一『〔増訂〕中國訪書志』（汲古書院 1983年）「國立故宮博物院藏宋金元版題解」（p 277上）。

²⁶ 『故宮物品點查報告』第三編第二冊：雨華閣南庫物品目録「卷二：南庫」p 65（2004年線裝書局影印本第6輯 p 88）。

²⁷ 故宮博物院編印『國立故宮博物院善本舊籍總目（下）』（1983年）p 1025-p 1026。「國立故宮博物院善本古籍資料庫」（<http://npmhost.npm.gov.tw/tscgi/tswwebbr?@@D 17377800405 E 8 E 9 D 3 F 1#BOT>）。

²⁸ 故宮博物院編纂『國立故宮博物院宋本圖録』1977年（p 148-150、図版 68）や呉哲夫「天祿琳琅書目續編著録之宋版書籍探究」（『國立中央圖書館館刊』11巻1期、1978年）は「別集」を「外集」に誤っており、任莉莉「柳宗元文集版本考」（『故宮學術季刊』第5巻第4期（1988

であり²⁹、嘉慶二年(1797)の失火で灰燼と化したことが定説になっているが³⁰、現存するから焼失を免れているわけであり、さらに言えば、本書は『天祿琳琅書目』に見えず、しかし「天祿繼鑑」を有して『後編』に見えるから、『天祿琳琅書目』完成の乾隆四〇年より後、御題文の末の「癸卯仲(乾隆四八年1783)春御筆」によって乾隆四八年(1783)前後に収蔵されたようであるが、すでに「天祿琳琅」・「天祿繼鑑」の印を有し且つ『後編』に著録されているということが焼失を免れたことを意味する³¹。

故宮藏本は「別集」を欠く計30冊であり、以下のように分冊されている。

冊	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10
卷	序・譜	目録	01・02	03・04	05・06	07・08	09	10	11・12	13
冊	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
卷	14	15・16	17・18	19・20	21・22	23・24	25・26	27・28	29・30	31・32
冊	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
卷	33・34	35・36	37	38	39	40・41	42	43	附録	外集

これによれば一両巻が一冊に装丁されており、『後編』Aは本来「三十二冊」であって「別集」上下2巻を欠いているために30冊になっているであろうことは容易に想像される。じつはこの2巻も現存する。

【A】=2) 北京図書館蔵#10712³²：

別集二卷。元刻本；二冊；十二行二十一字；小字雙行，同；黒口；左右雙邊。

現蔵本の鈐印に「乾隆御覽之寶」・「天祿繼鑑」・「大罽」・「西崖諸氏家藏」・

年)所取、p83)では訂正されている。呉氏は「外集二卷二冊則不詳何時佚散」(p21)、また阿部隆一『[増訂]中國訪書志』(汲古書院1983年)「國立故宮博物院藏宋金元版題解」でも「天目統一に「四函三十二冊」と著録、しかし現在別集二巻は散逸している」(p276)というに止まるが、劉薈『天祿琳琅研究』(p116)「表」中に同本であることが示されている。

²⁹ 『天祿琳琅書目』「凡例」に「一、諸書每冊前後皆鈐用御璽二：曰「乾隆御覽之寶」、曰「天祿琳琅」。(p11)。

³⁰ 早くから議論があるが、施氏「天祿琳琅查存書目」の「若嘉慶二年續輯時、『前編』著録之書仍然存在、何無灰燼之所。即或謂有一二存者併入『續編』、何後編各書收藏印記竟無一與『前編』相同者乎。由此觀之、可想見『前編』著録之書、胥被火化」(p482)といい、劉薈『天祿琳琅研究』は「天祿琳琅」藏書燬於宮火已成定論」(p31)とする。

³¹ 劉薈『天祿琳琅研究』(p28)は『國朝宮史續編』卷81「聖製五經萃室記」によって、『天祿琳琅書目』完成後に蒐集された善本は御花園の養性齋・摘藻堂・位育堂で「以待續入」の状態であったとする。焼失していなかったのは入蔵していなかったからであるが、「乾隆御覽之寶」・「天祿琳琅」等の鈐印はいつ押されたのであろうか。養性齋等にあった時とは考えにくい。疑問を感じる。

³² 北京図書館編『北京圖書館古籍善本書目』(書目文獻出版社1989年)「集部」p2062。

「子二子二永保用享」・「朱季子」等があり、『後編』Aの記録と完全に一致する。これこそが故宮博物院蔵本# 13833の散逸した部分である。北図# 10712の2巻二冊は故宮# 13833の巻43の後にあるべき一体で、乾隆御筆題文本計32冊であったが、何らかの理由によって分散した。すでに民国十四年の『故宮物品點查報告』が「三十冊」とし、それは「天祿琳琅查存書目」等の記録にも合致しているから、故宮# 13833が台湾に渡る以前からすでに分散していたのであり、「賞溥傑書畫目」に見えないのも恐らくこのことと関係がある。

本書は「宋版首部」九種の一つであり、同じくその一つである「御題宋板朱文公校昌黎先生集四函」の方は持ち出されている³³。「宋版集部」の音辯本を持ち出しながら乾隆御筆題文「宋版首部」を持ち出さなかったとは考えにくい。溥儀は持ち出したくても持ち出させなかったのであり、それはすでに無かったからとも考えられるが、『故宮物品點查報告』・「天祿琳琅查存書目」等によれば昭仁殿に存在した³⁴。ただし30冊であって2冊が欠落しており、そのことと何等かの関係があるにちがいない。

いっぽうすでに天祿琳琅になかった2冊、北図# 10712残本二巻には、「補羅羅書」・「曾經山陰張致和補羅齋」の蔵書印がある。この端本は張允中(1881-1960?)³⁵、字は致和に帰していた。後に民間に流れ、張氏に購入されたのではなからうか³⁶。また、本書には「北京圖書館藏」の鈐記があるが『國立北平圖書館善本書目』(1933年)・『北京圖書館善本書目』(1959年)には著録されていないから、入蔵は1951年に北京図書館に改名されてから後、つまり比較的最近のことであり、張允中の後、あるいはさらに複数の収蔵者を経て、北京図書館に入蔵したのである。

2: 【B】=北京図書館蔵# 4977³⁷:

四十三卷、外集二卷、附録一卷。元刻本；〔目錄、卷三至四、三十二至三十八

³³ 「收到書畫目錄」30aの「二十四日」(p 349)。

³⁴ 僅かに現存する「諸位大人借去書籍字畫玩物等糙賬」(『故宮已佚書籍書畫目錄四種』所収)には見えないが、貸借書籍はこれに限らないであろう。

³⁵ 室名は補羅庵、山陰紹興の人、民国期到北京で活動した収蔵家。

³⁶ 余輝「宋徽宗花鳥畫中的道教意識」(『翰墨薈萃：細讀美國藏中國五代宋元書畫珍品』上海博物館編、北京大學出版社2012年)によれば、ボストン美術館所蔵の乾隆帝旧蔵宋徽宗真蹟「五色鸚鵡圖」は、恭親王奕訢に賞賜され、辛亥革命後に孫の溥偉、溥儒等によって骨董商に売却、1925年に張允中が琉璃廠で購入。後に日本山本悌二郎に購入されて『澄懷堂書畫目錄』(1931年)に著録され、第二次大戦後にボストン美術館に買われた(p 245)。張允中「補羅齋」の題跋あり。

³⁷ 『北京圖書館古籍善本書目』p 2062。

配明初鈔本] 二十冊；十二行二十一字；小字雙行，同；黑口；左右雙邊。

現蔵本には鈐印「乾隆御覽之寶」・「天祿琳琅」・「天祿繼鑑」の他に「晃齋」³⁸・「思彦」・「古吳蔣氏珍藏」(巻1葉1a)・「浮清堂珍藏」³⁹(「附録」末)等の蔵書印があり、『後編』巻6「宋版集部」Bの記録と完全に一致する。同書と認めてよい。「目録」等一部に配明初鈔本があるだけでなく、巻首は劉「序」と「諸賢姓氏」のみであって『別集』と「年譜」を欠く。『後編』Bが蔵書印の所在を巻首・巻5・巻9・巻29・巻42・巻末として挙げており、この中には「卷三至四、三十二至三十八」が含まれていないから、補配は後人によるものかも知れない。「巻首」には「序」等があり、「目録」のみで構成されていなかったであろう。

巻	序目	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15
巻	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
巻	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	別	外	附	

『後編』Aの完本が4函32冊であるのに対してその「一版摹印」であるBが2函20冊であるのは缺巻と関係がある。Bが『別集』2巻・「年譜」と「目録、巻三至四、三十二至三十八配明初鈔本」を欠落していたならば、おそらく「別集」は1冊あるいは2冊で、配本部分は少なくとも8冊あったであろうから、存巻は「二十冊」に近くなるが、蔵本を検べたところ、「乾隆御覽之寶」・「天祿繼鑑」等の印は配本部分である「目録」にも押されているから、「二十冊」とは配明初鈔本を含むようである。

本書は「天祿琳琅査存書目」・『故宮善本書目』や『國立北平圖書館善本書目』には見えず、『北京圖書館善本書目』⁴⁰に「二十冊。凌志斌先生捐贈。四九七七」という。溥儀が密かに搬出させた書画の大部分は新京(吉林省長春)に運ばれたが、満洲国崩壊後の1946年に国民党政府接收大員張嘉璈(1889-1979)は天祿琳琅蔵書を選別して奉天(遼寧省瀋陽)の東北図書館(今の遼寧図書館)に運ばせ、47年に国民党が退却し始めると48年に教育部は瀋陽から北平図書館

³⁸ 『後編』や『清代天祿琳琅蔵書印記研究』(p106)は「晃□」に作るが、「晃」下字は「齋」に見える。

³⁹ 『清代天祿琳琅蔵書印記研究』(p107)は「清」を「青」に作る。

⁴⁰ 中華書局1959年、巻6「集部・唐五代別集類」(23a)。

に移管した⁴¹。その時、長春での選別に当たった二人の内の一人が凌志斌である⁴²。国民政府東北輔經委會総務処副処長、後に中央銀行総裁駐平津（北平・天津地区）代表となる。凌氏から北京図書館に寄贈されたのは、先の張允中収蔵と同じく新中国成立後、1950年代の前半であろう。

『後編』Bは「宋版集部」三部の一つであり、北京図書館に蔵されているが、長春にあった、つまり溥儀が持ち出したものであるから、「收到書畫目錄」にいう「宋板唐柳先生文集全函」・「宋板増廣註釋音辨唐柳先生集二函」のいずれかに当たる。

2: 【C】=北京図書館蔵# 10212⁴³:

四十三卷，別集二卷，外集二卷，年譜一卷，附錄一卷。明初刻本；十二冊。

本書の所在は最近に至っても専門家の間でも不明とされているが⁴⁴、北京図書館蔵# 10212がこれである。現蔵本には「乾隆御覽之寶」・「天祿繼鑑」の他に「芝秀堂」・「夢原」・「黃中氏」(巻首陸「序」1a)・「項睿謨印」・「睿謨」(巻1葉1a、巻11葉1a)等の蔵書印あり、これは『後編』Cの記録と完全に一致する。同書と認めてよい。項夢原(原名德棻、字希憲)、篤寿(1521-1586)の子、万曆四七年(1619)進士⁴⁵、号は「芝秀堂」か⁴⁶。「睿謨」は項篤寿の弟・元汴(1525-1590)の孫、項徳達の子、画家として知られる項聖謨(1597-1658)⁴⁷

41 王清原「偽皇宮藏書聚散考」(『文獻』2005年2期、p 204)、周越「清宮“天祿琳琅”珍籍在東北的聚散」(『大學圖書館學報』2009年3期、p 92)を参照。

42 劉薈「天祿琳琅研究」(p 65-75、p 94)。凌志斌が北図に寄贈したものには他に宋版『韋蘇州集』・明版『花間集』があり、劉氏は「不詳乃揀選時私留還是通過其他方式得到」(p 94)と慎重である。劉氏(p 94)によれば、1946年初、張嘉璈に派遣された凌志斌と李潤春の二人は書物のことが分からず、ただ印記によって選別し、かつ時間もなくて慌ただしく行なわれたために多くの書が「未被挑出」(p 75)漏れたという。

43 『北京圖書館古籍善本書目』p 2063。

44 劉薈「天祿琳琅研究」の「天祿繼鑑書存佚狀況、版本實情一覽」では528(2)(上海古籍出版社本『天祿琳琅書目後編』p 528第2書、つまり本稿のいうC)を「與下一部同版，應是明初刻本」と推測するが、「存藏」(p 134)を空欄にし、「尚不知下落的第二部應也是明初刻本」(p 404)という。

45 『四庫全書總目』巻46項夢原『宋史偶識』の提要。また沈紅梅「明代嘉興項氏兄弟藏書考略」(『圖書館工作與研究』2008-7)。

46 頼福順「清代天祿琳琅藏書印記研究」(中国文化大学出版社1991年)「芝秀堂」(p99)に拠る。それに「餘見「夢原」といい、「夢原」(p 124)では註に「兩浙藏書家印章考」に拠るとするが、蔣復璁「兩浙藏書家印章考」(『文瀾學報』3-1、1937年)「項夢原」(p 7)に「芝秀堂」は見えない。

47 『清史稿』(中華書局1977年)巻504「列傳・藝術」に「項聖謨，字孔彰，嘉興人，元汴之孫。初學文徵明，後益進於古，董其昌稱其與宋人血戰，又得元人氣韻。子奎，字東井，世其學」(p 13908)。

の弟。「黄中」は方大美の字、万曆十四年（1586）進士という⁴⁸。ならば桐城派の方苞（1668-1749）の高祖。

ただし12冊というのは『後編』Cが「一函、四冊」とするのに大きく合わない。蔵本は13行23字本であってA・Bの12行21字本とは「尺寸微豊、字畫較展、無『年譜』、乃另一刻」で相異なるだけでなく、行款の全く異なる版本である。13行23字（299字）本は12行21字（252字）本より一葉の文字数が1/5多く、したがって冊数が減少しているとしても、『後編』Cが4冊というのは極端に少なく、相当の欠落があったはずである。『後編』Cの印記の記録によれば少なくとも巻首、巻1、巻3、巻5、巻26はあったから、これらが4冊であったとも推測されるが、しかしその記録には漏れている個所が多い。たとえば「睿謨」は巻11葉1aにも見え、巻18葉1aの「黄/中」白文は「黄中氏」と同人である。また、『後編』Cは「無『年譜』」というが、現蔵本では書末、「附録」の前に在る。「年譜」はAのように巻首に在るべきであり、「外集」と「附録」の間に編入されていたために「無『年譜』」と誤認されたのではなかろうか。そうならば蔵本は後に配補されて4冊から12冊に増えたのではなく、『後編』にいう「四」は誤字であり、「十二」が考えられる。

本書は『京師圖書館善本書目』・『國立北平圖書館善本書目』には著録がなく、『北京圖書館善本書目』（1959年）巻6（23a）に「明初刻本：十二冊。邢捐。一〇二一二」という。北京図書館蔵善本には邢之襄（1880-1972）からの寄贈が多いから⁴⁹、これもその一つであろう。邢氏は東京帝国大学卒業、帰国後、北京司法部参事督辦、天津市政府秘書長、河北蓮池講学院副院長等を歴任し、新中国成立後に北京文史館館長となった。邢氏による本書の寄贈も1950年代の前半と推測されるが、それ以前、いかなる経緯で蒐集されるに至ったのかは未詳。ただ、『後編』によれば「宋版集部」音辯本には三部B・C・Dのがあり、「收到書畫目録」によれば溥儀搬出の「宋板」は二部あったが、その中の一部はBであり、いっぽう「天祿琳琅查存書目」・「北平故宮博物院圖書館南遷書籍清冊」・「故宮善本書目」では「宋版集部」の存在は著録されていなかった。そこで溥儀搬出「宋板」二部がBとこのCであるように思われるのだが、以下に掲げるように、Dを溥儀の搬出とする説もあり、予断を許さない。

⁴⁸ 頼福順『清代天祿琳琅藏書印記研究』「黄中氏」（p.120）の註351に拠る。

⁴⁹ 冀淑英『冀淑英古籍善本十五講』（国家図書館出版社2009年）「邢之襄、陳清華先生の捐書」p.223。

3: [D] 卷 1-7、16-25、35-42=遼寧省図書館(在瀋陽市)蔵

卷 8-15、26-34、43 =吉林省博物院(在吉林市)蔵

両館蔵本とも未見であり、実見されたであろう劉蕃氏の説に拠れば『後編』Dがこれである⁵⁰。満洲国崩壊後、新京(吉林省長春市)に置かれていた天祿琳琅蔵本は奉天(遼寧省瀋陽)の東北図書館に移管された。後に遼寧図書館に改名。新中国成立後の1952年に東北文化部は民間に流出していた善本古画を探し出して東北図書館に渡し、その宋元版の中に『唐柳先生集』があったという⁵¹。これがそれであるか。いっぽう吉林省博物館は1952年に吉林市に開館、1954年に吉林省政府の移転に伴って長春市の旧満洲皇宮に置かれ、後に吉林市に移って2003年に館は院に改称された。したがって蔵本は一部が吉林省博物院に、一部が遼寧省図書館に、留まったもののように解されるが、『東北地區古籍綫裝書聯合目錄』⁵²によれば遼寧省図書館蔵の音辯本では「増廣註釋音辯唐柳先生四十三卷附錄一卷外集二卷：……明刻本」が見え、これが劉氏のいう所に当たるとしても、所蔵先を遼寧省図書館と吉林大学図書館の二箇所とする。劉氏のいう「省博物院」は「大學圖書館」の誤りであろうか。吉林省博物院は『聯合目錄』の「參加單位」⁵³には見えない。

所蔵先についてはなお疑問が残るが、いずれにしても遼寧・吉林方面に留まっていたならば、これも薄儀搬出本にして『後編』Dつまり「宋版」ということになる。しかし「賞溥傑書畫目」等という「宋板」は「二套」(=「二函」)であり、『後編』Dには「一函、七冊」という。函数が合致しない。『後編』Dには「篇目同前「首部」、亦“麻沙小字”、“另一刻”」というが、行款の異同が全く注意されておらず、DもCと同じく、13行23字本にちがいない⁵⁴。A・Bは12行21字本であるから、Dの冊数は少なくなってよいが、現存では巻首1巻・「別集」2巻(『非國語』)・「外集」2巻、「附録」1巻を欠く計43巻(25+18)であり、「一函、七冊」という分量には合わない。

⁵⁰ 劉蕃『天祿琳琅研究』p134、p404。なお、天祿琳琅蔵書にあったにも関わらず、中国国家図書館・中国国家古籍保護中心編『第一批國家珍貴古籍名錄圖録』(国家図書館出版社、2008年)・『第二批國家珍貴古籍名錄圖録』(2010年)・『第二批國家珍貴古籍名錄圖録』(2012年)には見えず、国家珍貴古籍には何故かまだ指定されていない。

⁵¹ 王清原「偽皇宮藏書聚散考」(『文獻』2005年2期)p206。

⁵² 遼海出版社2003年、p2498。

⁵³ 「簡稱表」p1。

⁵⁴ 劉蕃『天祿琳琅研究』(p424)は「經審定」十三行二十三字本「元版麻沙本」とする。

卷	序目	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15
卷	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
卷	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	別	外	附	

7冊ならば毎6巻前後で1冊の装丁になり、各冊が相当分厚くて不自然である。これが『後編』Dであるならば「一函，七冊」にも誤字があり、たとえば「二函、十一冊」が考えられる。

しかしそうならば『後編』「宋版集部」音辯本の3部B・C・Dの内、B・Dが「收到書畫目錄」にいう「宋板唐柳先生文集全函」・「宋板増廣註釋音辯唐柳先生集二函」の二部に当たることになり、先に指摘したように「賞溥傑書畫目」には「宋板唐柳先生集二套」以外に「宋板増廣註釋音辯唐柳先生集二套」が脱落していることになるが、いっぽう『後編』Cは溥儀搬出本ではなくなり、「天祿琳琅查存書目」・『故宮善本書目』の著録に合わなくなる。そこで「天祿琳琅查存書目」等に基づいて劉蕃氏説を解釈するならば、「賞溥傑書畫目」には更に宋版一部があった、つまり計2部が遺漏していることになる。『後編』にはこの他に「元版」E・Fがあったが、これとの混同の可能性はないであろうか。

4：【E】巻1-15、21-23、33-35、別集上下＝北京図書館蔵（？）

巻18-20

＝吉林市図書館蔵（？）

卷	序目	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15
卷	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
卷	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	別	外	附	

両館の蔵本とも未見であり、実見されたと思われる劉蕃氏の説に拠るが⁵⁵、これについても疑点が多い。

劉氏は北京図書館蔵の巻1-15等の存23巻を『後編』巻11「元版集部」の「十六冊」本、つまり本稿のいう『後編』Eであると審定し、吉林市図書館蔵本をその残巻とする。『中國古籍善本書目』⁵⁶に#1492「元刻本」「四十三卷、別

⁵⁵ 劉蕃『天祿琳琅研究』(p149)に「卷十一元版集部」「622(2)」(『天祿琳琅書目後編』巻11、上海古籍出版社本p622の第2書)「存巻1-15、21-23、33-35、別集上、下」の存蔵を「國圖」つまり中国国家図書館(旧北京図書館)、「巻18-20」を「吉林市圖書館」とする。なお、『第一批國家珍貴古籍名錄圖録』等に見えず、國家珍貴古籍には指定されていない。

⁵⁶ 『中國古籍善本書目・集部』(上海古籍出版社1996年)巻23(45b、p128)

集二卷、外集二卷、年譜一卷、附録一卷」の所蔵を北京図書館と吉林市図書館にするのがこれであろうか。ただし、『東北地区古籍綫装書聯合目録』によれば、音辯本では先に掲げた遼寧省図書館等蔵本の他に「増廣註釋音辯唐柳先生四十三：……元刻本」が著録されているが、所蔵先を吉林市図書館と吉林大学図書館の二箇所としており⁵⁷、劉氏が吉林市図書館と北京図書館蔵とするのと一致しない。しかし劉氏が北京図書館蔵とする巻1-15等の存23巻がかつて瀋陽図書館に入蔵していたことは確かである。瀋陽図書館副主任であった陳国慶（1890-1973）の調査記録である「瀋陽圖書館藏長春偽宮殘存宋元珍本目錄考略」（民国三六年1947）⁵⁸に

増廣註釋音辯唐柳先生集四十三卷（殘）（唐）柳宗元撰。元刻本。

存二十三卷，自第一卷至第十五卷，又自第二十一卷至第二十三卷，自第三十三卷至第三十五卷，又『別集』上下二卷。共十冊。每半葉十三行，行大字二十三……

とあり、この10冊本の存巻は劉蕃氏のいう北京図書館蔵の存23巻と完全に合致する。また、昭和二一年（1946）、瀋陽図書館で国民政府が接収した図書を実見した前奉天図書館長の彌吉光長（1900-1996）は『『唐柳先生集』：唐柳宗元著。一〇冊。比定し得ず（七一）』⁵⁹というが、この10冊本は「瀋陽圖書館藏長春偽宮殘存宋元珍本」の中にあるべきもので、恐らく「現物未見のため目録を見ただけでは比定し得なかった」⁶⁰のであって陳氏のいう存23巻10冊本に違いない。北京図書館蔵の存23巻が陳氏確認の存23巻10冊であれば、それと吉林市図書館蔵の3巻（18-20）、さらに後に散佚したであろう巻（24-32、36-43

⁵⁷ 『東北地区古籍綫装書聯合目録』p 2498。存巻数については無記。

⁵⁸ 王清原整理「瀋陽圖書館藏長春偽宮殘存宋元珍本目錄考略」（『歴史文獻』16、2004年）p 105。

⁵⁹ 『彌吉光長著作集』（日外アソシエーツ株式会社1982年）巻5所収「天祿琳琅書屋の最終書志」p 210。「（七一）」は『接収目録』の番号。

⁶⁰ 同書で『唐柳先生集』の前にある「昌黎先生集」（p 209）。また、王清原「偽皇宮藏書聚散考」によれば、凌志斌等によって選別された蔵書計13箱は張嘉璈等によって瀋陽に運ばれて中央銀行に預けられ、1946年8月17日に瀋陽博物院籌委員會の金毓黻は中央銀行にいて接収の手続きをした（p 204）。その間の事情について彌吉光長「乾隆帝の文庫の運命」（『彌吉光長著作集』巻5所収）によれば、1946年3月に国民党軍が奉天に入城、9月上旬、奉天で天祿琳琅蔵書は「当時東洋一といった地下室の大金庫の中に有名な宋代の刻絲や骨董品と共に眠っていた。中央銀行を接収にいった經濟部の接収委員長張子嘯はその奥に宮廷府の宝物の本箱を多数発見した。既に略奪されたものとあきらめていたので、張氏は驚いて奉天博物館に打電した。博物館では、図書館と共同で引取りに向い、漸く入手して、調査を開始した」（p 218）、翌47年5月「中共が奉天に迫り、……館長は忽ちこの宝物の釘付けを命じた。七月初旬、再び中共は退却した。北京への交通が開けるとこれらの図書は北京へ送られてしまった」と回顧する。

=17) を考慮すれば、『後編』Eの「十六冊」に近い。問題は所蔵先である。

「長春偽宮殘存宋元珍本」が「瀋陽圖書館藏」や吉林市図書館蔵となっていることは理解できるとしても、北京図書館に入蔵しているはずの存23巻10冊本の方は『北京圖書館古籍善本書目』(1989年)にも『北京圖書館善本書目』(1957年)にも著録されていない。瀋陽図書館に保管された天祿琳琅蔵書の一部は1940年代末に北平(北京)に運ばれて北京図書館に入蔵し、その大部分は『北京圖書館古籍善本書目』に著録されているが、一部は未だに著録されておらず、それには恐らく普通本に格下げされたり、あるいは別にいきさつがあるとい⁶¹、また1959年に故宮から北京図書館に分配された天祿琳琅珍本は種々の原因によって3分の2以上が未だに編目されていないという⁶²。『後編』Eには巻首に「宮九/氏」・「高印/登雲」の印記があり、陳氏によればすでに巻首を欠いていたからこれを確認することはできないが、『後編』著録のものであれば各冊首葉には「天祿繼鑑」等の印記があったはずであるから、当然それを確認してのことであり、劉氏の説にも恐らく拠る所がある⁶³。そこでこれも未整理のために著録されていないのであれば、溥儀搬出本には『後編』の「元版」も含まれていたのであり、「賞溥傑書畫目」の「元板増廣注釋音辯唐柳先生集一部二套」＝「收到書畫目錄」の「元板唐柳先生集二函」がそれに当たることになる。

この書は奇妙な一本であった。実見した陳氏によれば、巻35で終わっており、また「目錄」中でも巻36部分から七葉半を缺いて「一若完全無闕者」、35巻本を装っていた。そこで陳氏は「當時進書之時、天威咫尺、尚敢作此欺人之舉、而諸臣奉敕檢校編目、亦且如此疏忽」⁶⁴と揶揄する。進書の時すでに35巻「十六冊」本に仕立てられていたならば、民国三四年(1945)満洲国崩壊の後、分散して内23巻「十冊」が長春から瀋陽図書館に移り、残りの内巻18-20が長春に留まって吉林市図書館に収蔵され、他の巻は散佚したが、後に「十冊」の方は北京に運ばれた、という経緯が考えられる。そうならば『東北地區古籍

61 「瀋陽圖書館藏長春偽宮殘存宋元珍本日録考略」の前文である王清原の解説p75。ただし『故宮普通書目』(民国二三年)、『故宮藏書目録彙編』中冊所収)には見えない。

62 『天祿琳琅研究』p79、p90。

63 『天祿琳琅研究』に「現藏中國國家圖書館之尚未編目者、未見原書、暫依『故宮檔案・本院撥給北京圖書館天祿琳琅書籍清冊』所記版本著録」(p113)とあり、「清冊」のみに拠るものであれば、実見されたわけではない。「清冊」は未見。

64 「瀋陽圖書館藏長春偽宮殘存宋元珍本日録考略」p106。

『綫装書聯合目録』の著録には誤りがある、あるいは吉林大学図書館蔵本は別本ということになる。

5:【F】=故宮博物院# 13835 (故善 002160-002171)⁶⁵:

四十三卷, 別集二卷, 外集二卷, 附録一卷。十二冊。十三行, 行二十三字。

元建陽書坊刊本。

現蔵本には「五福五代堂寶」・「八徵耄念之寶」・「太上皇帝之寶」の三玉璽の他に「乾隆御覽之寶」・「天祿繼鑑」・「桐樹/□□」の印記があり、『後編』Fの記載に符合する。早くは呉哲夫が「宋版集部: 原著録六九部, 存六部」中の『柳集』音辨本について「宣統十四年八月七日賞溥傑」⁶⁶というのがこれであり、阿部隆一が実見調査して「昭仁殿原蔵」本、「天祿各璽印、「桐樹/□□」印。天目続六著録」⁶⁷であることを確認している。本書は「天祿琳琅查存書目」にいう「元版集部」増廣注釋音辨唐柳先生集……十二冊: 見續卷一一、「北平故宮博物院圖書館南遷書籍清冊」の「元麻沙坊刊本註釋音辨唐柳先生集: 十二冊」であり、北京から南遷した後、台湾に渡った。

このように『天祿琳琅書目後編』に著録する宋版四部と元版二部の計6部すべての現存が知られる。『後編』の宋版D・元版Eの2部については新たな実見調査によって確認する必要もあるが、劉蓄氏の説に拠るならば、「賞溥傑書畫目」に遺漏している宋版1部はDであり、宋版Cは「賞溥傑書畫目」・「收到書畫目録」に漏れているのでなければ、「天祿琳琅查存書目」・「北平故宮博物院圖書館南遷書籍清冊」・『故宮善本書目』にも見えないから、溥傑搬出以前にすでに天祿琳琅にはなかったことになる。邢氏が入手したのはすでに清宮から流出していたからであるが、その地は東北ではなく北京であろう。

『後編』では「宋版首部」の1部については行款が、「宋版集部」の3部については巻数・行款が記されていないが、現存蔵本によれば、いずれも43巻・13行本であって45巻本でも12行本でもない。また、「元版集部」E・Fの2部も現存蔵本によれば43巻・13行本である。

⁶⁵ 故宮博物院編印『國立故宮博物院善本舊籍總目(下)』(1983年) p 1025。「國立故宮博物院善本古籍資料庫」(<http://npmhost.npm.gov.tw/ttsagi/ttswebbr?@B153E7B094E5F9E23342>)。

⁶⁶ 「天祿琳琅書目續編著録之宋版書籍探究」 p 21 下。

⁶⁷ 『〔増訂〕中國訪書志目録』國立故宮博物院藏宋金元版題解 p 276 下。ただし「六」は誤り。「天目続六」つまり『天祿琳琅書目後編』巻6は「宋版集部」を指し、『天祿琳琅書目』巻6ならば「元版集部」を指す。「桐樹/□□」印を有するものは『後編』巻11「元版集部」F。

II 四庫全書各閣本とその底本

天禄琳琅の蔵書よりやや遅れて開始し、ほぼ並行して編纂されていたのが四庫全書である。しかし『四庫全書總目』と各閣本の書前「提要」とは異なり、また底本も異なる。

四庫全書提要の異同

『欽定四庫全書總目』⁶⁸の提要に次のようにいう。

『増廣注釋音辯柳集』四十三卷：内府藏本。

舊本題“宋・童宗說注釋，張敦頤音辨，潘緯音義”。宗說……。之淵「序」但題「柳文音義」，「序」中所述，亦僅及緯仿祝允『韓文音義』撰『柳文釋音』⁶⁹，不及宗說與敦頤。書中所注，各以“童云”、“張云”、“潘云”別之，亦不似緯自撰之體例。蓋宗說之『注釋』、敦頤之『音辨』本各自為書，坊賈合緯之『音義』刊為一編，故書首不以『柳文音義』標目，而別題曰『増廣注釋音辯唐柳先生集』也。其本以宗元『本集』、『外集』合而為一，分類排次⁷⁰，已非劉禹錫所編之舊。……舊有明代刊本，頗多譌字。此本為麻沙小字板，尚不失其真云。

後に民国に入ってから胡玉縉（1859–1940）は「疑『提要』所見為不全本，謂『本集』、『外集』合而為一，亦與此異」と懷疑し⁷¹、張元濟（1867–1959）も「『四庫』著録僅四十三卷，『非國語』、『外集』、『附録』均已佚去，故（『四庫總目』提

⁶⁸ 『四庫全書總目』（中華書局 1965 年影印浙本）卷 150「集部三」（p 1289 中）、『欽定四庫全書總目（整理本）（下）』（中華書局 1997 年 p 2009）。整理本は殿本（乾隆五十四年 1789）を底本とし、浙本（六〇年）・粵本（同治七年 1868）を参考する。残存する翁方綱等十種の分纂稿『四庫提要分纂稿』（呉格等整理、上海書店出版社 2006 年）には見えない。

⁶⁹ 文淵閣本・文津閣本および文溯閣本（『金毓勳手定本文溯閣四庫全書提要』巻 82（9 a）（1935 年遼海書社鉛印出版、1999 年中華全國圖書館文獻縮微複製中心影印、p 681 上）の書前「提要」では「柳文」を「柳氏」に誤る。劉玉珺『四庫唐人文集研究』（巴蜀書社 2010 年）「附録」の「文淵閣四庫唐集遺存概況」（p 354）によれば四庫本『柳集』3 種で韓醇詒訓本と魏仲拳五百家註本は遺存（浙江省図書館蔵）しているが、音辯本は残っていない。なお、文津閣本に拠って文淵閣本を補遺した楊訥・李曉明編『文淵閣四庫全書補遺（集部）』（全 15 冊、1997 年北京図書館出版社）第 1 冊「唐別集」に『柳集』はない。

⁷⁰ 文淵閣本書前「提要」では「分體排次，合而為一」に作る。その他、「緯字仲寶」の「寶」を「賢」に作る等の誤字あり。劉玉珺『四庫唐人文集研究』「四庫唐集提要研究」の「唐集提要勘誤」（p 292）では「寶/賢」の異同のみを挙げる。楊武泉『四庫全書總目辨誤』（上海古籍出版社 2001 年、p 203）は『總目』が「（童）宗說，南城人，始末未詳」とする所について補足するのみ。

⁷¹ 『四庫全書總目提要補正』（王欣夫校 1961 年、台湾・木鐸出版社 1981 年影印）p 1205（p 301 下右）。

要)云：“以宗元『本集』、『外集』合為一，分類排列，已非劉禹錫所編之舊第。”殊不知是『本、外集』固在，並未與『本集』合併，館臣僅見殘本，乃有此致疑之語也⁷²と指摘するが、「以宗元『本集』、『外集』合而為一」というから正集43巻の他に『外集』を備えていたはずであり、現に四庫全書本は、巻頭に冠する書前「提要」で「臣等謹案：『柳河東集注』四十三巻，舊本題……」という巻数は『總目』と同じであるが、『外集』さらに『非國語』・『附録』も備えているから、ただ正集の巻数を示したに過ぎないのであって「不全本」でも「均已佚去」「殘本」でもない。ただし書名は異なる。

「舊本題」という所は四庫本が毎巻行3に「宋・童宗説、張敦頤、潘緯音釋」とあるのに近いが、四庫本の書前「提要」では書名を「柳河東集注」に作り、また毎巻1a行2に「『柳河東集注』巻幾」とするから、『四庫總目』にいう書名「増廣註釋音辨柳集」と異なる。厳密に言えば『總目』より早い『四庫全書簡明目錄』(乾隆三九年編、四七年完成)⁷³巻15では「『増廣註釋音辨柳集』四十三巻」⁷⁴と称しているが、文淵閣本(乾隆四六年)では巻首に乾隆帝「御製題『増廣註釋音辨唐柳宗元集』」詩があるにも関わらず、「柳河東集注」と称し、また文淵閣本(乾隆四七年)⁷⁵や文津閣本(乾隆四九年)は、「御製題」詩はないが、同じく書前「提要」中および各巻首行でも「柳河東集注」と称している。つまり同一書に対して「増廣註釋音辨唐柳宗元集」・「増廣註釋音辨柳集」と「柳河東集注」の三称が使われているわけである⁷⁶。

『總目』の提要と四庫全書各閣本の「提要」との間に異同が見られるのはすでに周知の事実であるが⁷⁷、『柳集』音辨本における相異は書名だけではない。

72 『中國歷代書目題跋叢書』2輯所收(2007年)『寶禮堂宋本書録』(民国二七年1938) p 287。

73 李常慶『「四庫全書」出版研究』『「四庫全書簡明目錄」的編纂』p 55。

74 『四庫全書簡明目錄(下)』(華東師範大学出版社2012年) p 596。

75 文淵閣本の音辨本は未見。今、『金毓黻手定本文淵閣四庫全書提要』巻82(9a)に拠る。なお、『四庫總目』との異同については羅瑛等『金毓黻手定本文淵閣四庫全書提要・別集類』補正『四庫全書總目』舉例』(『圖書館學刊』2007-5)が『孟浩然集』・『翰苑集』等を例にして指摘している。

76 『欽定四庫全書總目(整理本)』も注して「按：文淵閣庫書作『柳河東集注』四三巻、『別集注』二巻、『外集注』二巻、『柳河東集注附録』一卷、『總目』書名與之有異，且著録不全」(p 2009)と注意するが、書名を『柳河東集注』に作るのは文淵閣本だけではなく、文津閣本・文溯閣本等も同じ。

77 陳曉華『“四庫總目學”史研究』(商務印書館2008年)『「四庫全書」提要之間關係』の「書前提要與『四庫全書總目』提要的比較」(p 71-79)、劉玉珺『四庫唐人文集研究』(四庫唐集提要研究)(p 236-318)に詳しい。劉氏(p 237註1)は先行研究を列挙する。

文淵閣本には巻首の「提要」の後に陸之淵「柳河東集註序」・劉禹錫「唐柳河東文集序」・「音釋唐柳河東集諸人姓氏」があるが、文津閣本には「提要」とその後に陸「序」のみがあり⁷⁸、また共に潘緯「序」・「年譜」・「目録」を欠く。『天祿琳琅書目』の「前〔有〕唐・劉禹錫原「序」、宋・陸之淵「序」並「編集姓氏」の編次にやや合致しない。つまり巻頭に陸「序」が掲げられており、その表題には「柳河東集註」とある。陸「序」は潘緯の『柳文音義』のために寄せたものであり、南宋の書坊が童宗説『注釋』、張敦頤『音辨』に潘緯『音義』を加えて編成したために「書首不以『柳文音義』標目、別題曰『増廣註釋音辨唐柳先生集』」と解釈したのである。書名を「柳河東集註」と題するのは陸「序」と同じであって「増廣註釋音辨」の略称としては同義であるが、「増廣註釋音辨」を「別題」とするから、陸「序」にいう所を本来の書名と考えたのであるか、あるいはその逆、つまり潘緯『柳文音義』のための「序」であるから、「柳文音義序」に作るべきものであり、「柳河東集註」によって陸「序」を「柳河東集註序」に改変したのである。宋元明の諸本ではいずれも「柳文音義序」と称しているから後者が近く、さらに想像を逞しくすれば、題簽ではしばしば略称・簡称が用いられるから、新装の題簽に「柳河東集註」とあったのかも知れない。そもそも四庫全書本の書名が異なるのは音辯本に限らない。『四庫總目』の「五百家註音辯唐柳先生文集」は四庫本では「五百家註柳先生集」⁷⁹、四庫底本（北京図書館#2038）の「新刊詁訓唐柳先生文集」は『四庫總目』では「詁訓柳先生文集」、四庫本ではただ「柳河東集」に作る。ここでも詁訓本と同じ「柳河東集」が用いられて「柳河東集註」と略称され⁸⁰、それが陸「序」に及んだものと考えてよさそう。

四庫全書の底本

最も重要なのは本文、つまり底本の異同である⁸¹。文津閣本と文淵閣本が明

⁷⁸ 劉玉珺『四庫唐人文集研究』「序跋的失收」(p 190)には文淵閣本と文津閣本の不一致を15例挙げて指摘されているが、文津閣本には陸「序」があったためか、挙げられていない。また有無の不一致は「序」に止まらない。

⁷⁹ 『天祿琳琅書目』巻3「宋版集部」では『新刊五百家注音辨唐柳先生文集』、p 72。北京図書館蔵宋本存11巻（#7000）では各巻の首に多くが「新刊五百家注音辨唐柳先生文集」に作り、一部は「新刊」二字を欠く。『中華再造善本』所収、北京図書館出版社2003年。

⁸⁰ 劉蕃『天祿琳琅研究』(p 268)にも「『四庫總目』多以省稱、古稱取作書名、而『天祿琳琅書目』完全保留了書名前綴“纂圖互註”……“増廣註釋音辨”、“増刊校正”、“重廣分門”等冠詞、尊重書籍原貌」。また、韓錫鐸「『閣書提要』與『總目提要』的不同」(甘肅省図書館編『四庫全書研究文集』、敦煌文藝出版社2006年)は、文淵閣本と『總目』の経部・史部の「提要」

らかに異なっている個所は全体の 1/4 にも及ぶ。文津閣本は巻 40 で 15 篇中 6 編しか収録しておらず、9 篇を巻 41 の後半に混入し、巻 41 では後半 8 篇を、巻 42 では末の詩を欠落、巻 33・35・42・「附録」等では註を一部削除している。さらに目を疑うのは文津閣本の巻 4・6・7・9・11・13・15・18・20・30 計 10 巻にも及ぶ不一致で、その内容は詁訓本と一致するから、文津閣本『柳河東集注』に詁訓本『柳河東集注』が大量に混入したものと考えられる。その底本は不明であるが、『四庫總目』がいう「内府藏本」がこのような混乱した一本であったとは信じ難く、これは館臣の管理と取扱が杜撰であった証拠である⁸²。ただ欠落部分を詁訓本で補配して繕ったただけとは考えられない。また、「外集」下巻の末に「詳校官刑部員外郎臣許兆椿：總校官候補知府臣葉佩蓀、校對官學錄臣常循、謄錄監生臣高象觀」、巻 43 末には「……許兆椿、臣紀昀覆勘：……葉佩蓀、……常循、……高象觀」とあるが、「外集」上下巻と「附録」の編次も顛倒している。なお、詳校官等は文津閣本では每冊末に記されているが、文淵閣本では每冊の表紙にあり、「外集」には「詳校官内閣學士臣瑞保、檢討臣何思鈞覆勘：總校官進士臣朱鈐、校對官編修臣馮敏昌、謄錄監生臣方祖益」という。文津閣音辯本の混乱は全書の四分の一にも達することを指摘し、使用者の注意を喚起しておく。

巻首\閣本	文淵	文津
乾隆帝「御製題增廣註釋音辨唐柳宗元集」	○	×
陸之淵「柳河東集註序」	○	○
潘緯「柳文音義序」	×	×
劉禹錫「唐柳河東文集序」	○	×
「音釋唐柳河東集諸人姓氏」	○	×
文安禮「年譜」	×	×
「目錄」	×	×

『四庫總目』と各閣本および『天祿琳琅書目』の著録には編次に一部合致しない所があるが、書名・巻数の不一致は整合可能である。『四庫總目』のいう

を比較して書名の不一致を指摘し、「提要前的書名纂修官的隨意成分很大」(p 50) とする。

⁸¹ 韓錫鐸「『閣書提要』與『總目提要』的不同的存在を指摘しているが、不同は「提要」部分に限ったものではない。

⁸² 陳曉華『“四庫總目學”史研究』の「管理疏漏及館臣舞弊」(p 108-116) に詳しい。ただし『柳集』音辯本の文津閣本については言及がない。

「内府藏本」音辯本は、『天禄琳琅書目』のいう「元版」の正集「四十三卷」本と同版である可能性は高いが、固より天禄琳琅所蔵のものではない。『四庫總目』は乾隆三七年（1772）に開始、四七年完成、六〇年刊印。今人の輯本『四庫採進書目』⁸³を検すれば、集本としてはわずかに『武英殿第一次書目』⁸⁴に『柳文』二十本が見えるのみである。ちなみに『武英殿書目』には『韓文』の書名は見えず、『柳文』二十本の前に『五百家註音辯韓昌黎先生集』四本⁸⁵という具体的な書名で著録されており、『四庫總目』の「五百家註音辯昌黎先生文集」に「内府藏本」という。なお、韓愈の集本では『四庫採進書目』には他に『韓昌黎集』十本⁸⁶を録する。『柳文』二十本の謂いは一般的には一種20部と解すべきであるが、四庫全書に収める『柳集』にも音辯本の他に詁訓本・五百家註本があつてともに『四庫總目』に「内府藏本」といい、音辯本・詁訓本・五百家註本の3種およびそれらの通修本を含む諸本であるのか⁸⁷、明らかにし難いとしても、「二十本」に誤りがないとすれば、武英殿にはかなりの部数の『柳集』が収蔵されていた。

四庫底本の存否は確認することができず、43巻の12行本か13行本かは現段階では不明であるが、四庫本を含む諸本を対校した結果、43巻13行本の明刊本しかも四部叢刊本より後出の一本であることは明白である。対校については別稿に掲げて詳考するが、明刊本を底本とした背景には、より古い元刊本・宋刊本を備えていなかっただけでなく、音辯本においては四部叢刊本さえも元刊本と考えられていたように、元明間の通修本が多かった事情がある。ただ文津閣本については館臣の杜撰でしかない。

Ⅲ 清学部図書館蔵本と北京図書館蔵本

この他、清学部（後の教育部）図書館に蔵する音辯本で12行本と記録するものがあるので附考しておく。

⁸³ 呉慰祖校訂『四庫採進書目（原名各省進呈書目）』（商務印書館1960年）。

⁸⁴ 『四庫採進書目』「補遺」所収p187。他に『河東先生龍城録』3本（『四庫採進書目』所収『浙江省第八次呈送書目』p127）・『河東集録』3本（『四庫採進書目』所収『都察院副都御史黃交出書目』p177）あり。

⁸⁵ 『四庫採進書目』「補遺」所収『武英殿第一次書目』p187。

⁸⁶ 『都察院副都御史黃交出書目』p178。註に「四庫以『五百家注音辨』及（明）東雅堂等本『昌黎先生集』著録」。ただし『五百家注音辨』本『昌黎先生集』は『武英殿書目』に見える。

⁸⁷ 註（p187）に「案四庫據内府本著録者凡三。曰詁訓柳先生文集……曰増廣註釋音辯柳集……曰五百家註音辯柳先生文集」。

清朝政府は義和団の乱後に西洋化に乗り出し、光緒三十一年（1905）に学部を設立し、科举制度を廃止して学制を一新すると、宣統元年（1909）に学部の管轄下に京師図書館の創設を決定した⁸⁸。北京図書館の前身である⁸⁹。清内閣大庫・翰林院・国子監南学等の旧蔵書の他に、光緒三十四年、繆荃孫（1844–1919）は図書館設立に先だって両江総督端方（1861–1911）等を派遣して江南の私家蔵書を購入させ、学部に取りめて図書館に備えた⁹⁰。宣統元年、正監督（館長）に任命された繆荃孫によって整理された『清學部圖書館善本書目』の「集部」⁹¹には次の『柳集』二部を著録する。

『柳文』四十二 [三] 卷『別集』二卷『外傳 [集]』二卷：

唐・柳宗元撰。元刊本，每半葉十二 [三] 行，行二十 [三] 字，有馮登府跋：

“『增廣注釋音辨唐柳先生集』四十二 [三] 卷、別集二卷、外傳 [集] 二卷、附録一卷。題“南城先生童宗說注釋，新安先生張敦頤音辨，雲間先生潘緯音義”。前有劉禹錫序……余得之禾中書估。時甲午（道光十四年 1834）人日。”

『柳先生文集』四十三卷『別集』二卷『外集』二卷：

明刊本，與上『韓文』合刻。

これによれば 42 卷の 12 行本があったことになる。巻数・行款ともこれまでの著録には見えなかった一本である。しかしいづれも杜撰な記録による単なる誤字である。そのことは、その後の新蔵を加えて館長夏曾佑（1863–1924）によって再整理された『京師圖書館善本簡明書目』（民国五年 1916）第 4 冊（3a）で出自を示し、『柳集』については次の三部を著録している所によって判明する。

『柳先生文集』四十三卷『別集』二卷『外集』二卷：歸安姚氏書。

唐・柳宗元撰。舊題“宋・童宗說注釋，張敦頤音辨，潘緯音義”。

元刊本。

⁸⁸ 関晓紅『晚清學部研究』（広東教育出版社 2000 年）「興辦圖書館」p 470、楊洪昇『繆荃孫研究』（上海古籍出版社 2008 年）「繆荃孫與學部圖書館」p 202。

⁸⁹ 1928 年に国立北平図書館、1950 年に国立北京図書館、1951 年に北京図書館、1998 年に国家図書館と改称。

⁹⁰ 関晓紅『晚清學部研究』p 473、楊洪昇『繆荃孫研究』p 202。

⁹¹ 鄧実輯『古學彙刊』（上海国粹学報社、民国元年 1912）第 5 編上册 5a。楊洪昇『繆荃孫研究』は繆荃孫『藝風老人年譜』（民国二五年）「宣統三年（1911）」条に「九月復交新編『善本書目』八卷」とあるのによって同年の成書とするが（p 85、p 207）、「或刊入時改訂」（p 85）という。

缺卷四十，餘卷亦有缺葉。

十六冊。

按：四庫所收無「別集」・「外集」。

又一部：歸安姚氏書。

元刊本。行款與上同，無「別、外集」。有馮登府跋。

十二冊。

又一部：清内閣書。

朝鮮本。

存三之六。

一冊。

上二部は「歸安姚氏」こと姚覲元（1823-1902）の蔵書である。同書は姚覲元『咫進齋善本書目』巻4に著録されており⁹²、繆氏『清學部圖書館善本書目』に見える「馮登府跋」もこれによって転載されたものであることが知られる。繆荃孫はかつて姚覲元の幕僚であり、覲元の子の歿後、その蔵書は繆氏によって京師図書館に購入された⁹³。したがって繆氏『清學部圖書館善本書目』の姚氏旧蔵書に関する著録は『咫進齋善本書目』に基づいたものであるが、姚・繆・夏三氏の著録には多くの不一致が見られる。これらを整合させれば、繆氏のいう「四十二卷」・「外傳」は姚氏の誤りを踏襲するものであって夏氏の「四十三卷」「外集」が正しく、また行款について姚氏は「半葉十三行，行二十三字」「行款與前本同」としており、繆氏のいう「半葉十二行，行二十字」には誤脱がある。

ただ四庫全書本に似ている部分があり、気になる。第一部の「按」以前の著録、つまり書名と「舊題」部分がそれであり、また「缺：卷四十，餘卷亦有缺葉」は『咫進齋善本書目』の「文集缺第四十卷，餘卷亦有缺葉」を襲うが、これも四庫本に近い。先に触れたように、四庫本の間には相異があり、そこで四庫本の底本が後に姚覲元に帰して後に学部図書館に入蔵されたかとも懷疑されるが、四庫本は巻40全体を欠くものではなく、また「別集」・「外集」を有する。「按：四庫所收無『別集』・『外集』」とは『四庫總目』に「『増廣註釋音辯唐柳集』四十三卷」とのみあることによる誤解であろう。「按」以前の著録もそれによる。つまり四庫本ではなく、ひとえに『四庫總目』に基づく著録であった。

その十数年後、『京師圖書館善本書目』が京師図書館主任張宗祥（1882-1965）によって修訂され、その稿本は未刊であるが、それに基づいて調査・書影した

⁹² 『中国著名藏書家書目彙刊—近代卷（28）』（商務印書館2005年）所収、p120。「四十二〔三〕卷」・「外傳〔集〕」・「附廣〔録〕」等の誤字あり。

⁹³ 楊洪昇『繆荃孫研究』p31。

倉石武二郎『舊京書影』(1930年)には「歸安姚氏書」二部が著録されている⁹⁴。しかし趙万里『北平圖書館善本書目(1933年)』(1928年に北平図書館に改名)巻4では『増廣註釋音辨唐柳先生集』四十三卷『別集』二卷『外集』二卷『附録』:唐・柳宗元撰。元刻本⁹⁵のみを著録する⁹⁵。先に触れたように、北平図書館の善本は1931年の満州事変勃発後、南遷して再び北京図書館に帰還し⁹⁶、戦後新たに編纂された『北京圖書館善本書目(1959年)』は主に1949年以後新たに収蔵された善本を捐贈者名と共に著録しており⁹⁷、音辯本43巻本は計7部に及ぶが、「歸安姚氏書」二部はその中にすでに見えない。しかしたしかに帰還している。

北京図書館所蔵#01025『増廣註釋音辨唐柳先生集』四十三卷、別集二卷、外集二卷、附録一卷。明初刻本、十六冊⁹⁸は「學部圖書館之印」・「京師圖書館收藏之印」の印記を有し、題簽に「元栞唐柳先生文集」とあり、「咫進齋藏」と署す。『京師圖書館善本簡明書目』(1916年)にいう「歸安姚氏書」二部中の第一部である。第二部は北京図書館所蔵#0528『増廣註釋音辨唐柳先生集』四十三卷、附録一卷。明初刻本、馮登府跋。十二冊⁹⁹であり、『別集』・『外集』を欠き、「學部圖書館之印」・「京師圖書館收藏之印」を有す。いずれも43巻13行23字本にして「明初刻本」と鑑定されている。

今日、北京図書館に蔵されて『北京圖書館古籍善本書目(1989年)』に著録されている音辯本はこれらを含み、計12部に達する¹⁰⁰。『清學部圖書館善本書目』(1912年)・『京師圖書館善本簡明書目』(1916年)・『北平圖書館善本書目』(1933年)・『北京圖書館善本書目』(1959年)との対照表を示す。

この中で、先に紹介した『後編』A=#10712、『後編』B=#4977および#8711の三部を元刻本とするのを除き、『後編』C=#10212および他の8部は明初刻本・明刻本と鑑定されている。

⁹⁴ 『舊京書影』:北平圖書館善本書目(1933年)(人民文学出版社2011年)「提要」p53(原書p37)。「書影」p659-p662(原書p597-p600)。

⁹⁵ 『舊京書影』:北平圖書館善本書目(1933年)p862(巻4葉3、p82)。

⁹⁶ 『舊京書影』:北平圖書館善本書目(1933年)「出版説明」p8。

⁹⁷ 「編例」に「一:本編所收、以建國十年以來新入藏書為主。一九三七年至一九四八年陸續收入之書、亦隨同編入」。

⁹⁸ 『北京圖書館古籍善本書目』(書目文獻出版社1989年)「集部」p2063。

⁹⁹ 『北京圖書館古籍善本書目』p2062。

¹⁰⁰ この他に20巻本(#5066)「明刻本」一部があるが、本稿では43巻本・45巻本とは分けて扱う。

No.	北京圖書館蔵		1912年	1916年	1933年	1959年	1989年
01	# 8711	潘捐	/	/	/	元刻	
02	# 4977	凌捐				元刻	
03	# 3549	嚴蔵				明初刻	
04	# 10212	邢捐				明初刻	
05	# 6251	翁捐				明初刻	
06	# 4405	翁蔵				明正統	
07	# 9861	陳捐				明初刻 ¹⁰¹	
09	# 0528	姚蔵	元刊		?	?	明初刻
10	# 10215	姚蔵	明刊?	元刊		?	明初刻
07	# 10712	張蔵	/	/	/	/	元刻
11	# 7632						明初刻
12	# 18407						明初刻

おわりに

以上の清朝内府蔵本はいずれも43巻本であって多くが13行23字本であるが、天祿琳琅には12行21字本もあった。今、天祿琳琅蔵本刊刻時期の諸説と現在の所蔵等をまとめれば次の表のようになる。

45巻・43巻の12行本と43巻の13行本とはいかなる関係にあるのか。宋代の45巻本から元代の43巻本に推移したことは容易に想像されることに属すであろうが、43巻本には12行本と13行本があり、A=43巻12行本は今人においても年代鑑定が宋・元に分かれる。では清初の文献考証学『後編』が「宋版」とした根拠は何なのか。それには恐らく次の三つの点が考えられる。

1) まず客観的で具体的な根拠となり得るのが宋諱による「闕筆字」の存在であり、『後編』Aはそれによって「的是南宋中葉本」と断言する。ただし「南宋中葉」とまで限定しながら、具体的に如何なる字まで避諱闕筆されていたのかは、なぜか示されていない。後に故宫博物院文献処長呉哲夫は「宋諱避至敦

¹⁰¹ 1959年版では「明初刻」、1989年版では「明刻」になっているが、他の例を見ても旧説が踏襲されていることから、意を以て「初」を削除したものではなかろう。

¹⁰² 『天祿琳琅研究』(p.134)に「宋刻本(與下一部同版、應是明初刻本)。「宋刻本」とするのは『天祿琳琅書目後編』に拠るもの。

『天祿琳琅書目後編』	宋版首部	宋版集部			元版集部		録外 (南庫)
	A	B	C	D	E	F	
賞溥傑書畫目	/	●	/	?	●	/	/
收到書畫目錄	/	●	/	●	●	/	/
故宮…點查報告	●	/	/	/	/	●	●
天祿…壺存書目	●	/	/	/	●(誤)	●	○
故宮…南遷…清冊	●	/	/	/	/	●	●
故宮善本書目	●	/	/	/	/	●	●
北京圖書館	#10712	# 4977	#10212	/	#?	/	/
	元刻		明初刻	/	/	/	/
遼寧省圖書館等	/			#?	#?	/	/
故宮博物院 (台湾)	#13833	/				#13835	#13834
	宋刻	/				元刻	元刻
阿部説	宋末元初	/				明刻	明初刻
劉蕃説	元刻		明初刻 ¹⁰²		元刻		/
行 款	12行 21字			13行 23字			
正 集	43卷						

字、廓以下諸帝諱不缺筆、殆刊於光宗昭熙年間¹⁰³とし、「昭[紹]熙」(1190-1194)は「南宋中葉」に当たるが、故宮博物院蔵本を詳細に調査した阿部隆一は「玄朗……慎敦等に欠筆を見るが、此等の宋諱の字は欠筆せざる所も多く不定である。字様に円潤を帯びた元風も少なからず、宋末元初間の所謂麻沙である」¹⁰⁴として「中葉」よりも後、しかも宋末から元初の間として幅をもたせる。『北京圖書館古籍善本書目』の根拠は不明であるが、故宮博物院図書館館長傅增湘(1872-1949)等、民国期の諸氏の説が影響していると思われる。これについては次号で詳考。

2)「精審足寶」にして「今通行乃明鑄、卷帙音注皆照此本、而舛誤特甚」、明刻本に比べて文字に誤りが少ないことも一つの傍証となる。ただしこの限りでは元刻であることを妨げない。

¹⁰³ 「天祿琳琅書目續編著録之宋版書籍探究」(『國立中央圖書館館刊』11卷1期、1978年、p 21)。

¹⁰⁴ 『中國訪書志目録』p 276。

3) さらに求めれば、「印記與『韓集』多同，蓋以麻沙本相配也」がある。この直前には『御題朱文公校昌黎先生集』を掲げており、それに「宋・麻沙本」として次のようにいう。

王伯大音釋。……今此刊者，未詳何人，又以伯大所輯「音釋」散諸句下。
……伯大，……嘉定七年（1214）進士，理宗朝參知政事。……據印記：
……其「大經」一印，或宋羅大經，著『鶴林玉露』者。

「大經」印は『後編』Aの『柳集』音辯本にも見えて共通する。ただし筆者が調査したところ、正確には「大罽」¹⁰⁵に作る。『鶴林玉露』の著者として知られる羅大經（宝慶二年1226進士：1196–1252後）は南宋・理宗朝（1224–1264）の人であるから、その頃までには刻行されていたことになる。羅大經の所蔵であったことは時代的に見て矛盾するものではなく、また柳文に触れることも多い。たとえば『鶴林玉露』甲編卷4「罵尸蟲文」¹⁰⁶では「柳子厚文章精麗，而心術不掩焉，故理意多舛駁」といって柳文「罵尸蟲文」を批判し、卷5「韓柳歐蘇」では韓・柳を比較して「韓有所不能作」つまり柳宗元に特異の作として「平淮雅」・「起廢答」・「乞巧文」・「與韋中立論文書」・「段太尉逸事」・「封建論」・「梓人傳」・「晉問」等具体的な作品名を挙げ、また結論して「韓柳猶用奇字重字，歐蘇唯用平常輕虛字」ともいう。さらに丙編卷5「南中巖洞」では「訾家洲記」、卷6「方寸地」では「郭橐駝」を、「士脩於家」では「河間傳」を挙げている。「河間傳」を収めない一本もあるが音辯本は『外集』に収める。羅大經はただ通読しただけでなく、眼光の紙背に徹するほどに熟読玩味していたこと、明らかである。「甲編自序」は「淳祐戊申（八年1248）正月望日」の作であるから、それ以前に本書を収蔵していたであろう。しかし音辯本45巻本には「淳祐九年」作の劉欽「後序」があるから、淳祐八年以前に音辯本以外の集本でこれらの作品を読んでいたことになる。あり得ないことではないが、蔵書印では名ではなく字・号を用いることが多い点や「大罽」に作ることも考慮すれば極めて疑わしい。また、一説にこれを施大經の印とする¹⁰⁷。施大經（1560?–1610）、字は天卿、号は石渠・玉屏、万曆十三年（1585）の挙人で、明末の蔵書家としても知られる¹⁰⁸。しかし、この場合も印文が名であってしかも「經」字

¹⁰⁵ 陸「序」1a行1、「別集」下卷末等。

¹⁰⁶ 王瑞来点校本（中華書局出版1983年）p 65, p 93, p 317, p 336, p 338。

¹⁰⁷ 頼福順『清代天祿琳琅藏書印記研究』（台湾・中國文化大學出版部1991年）p 70。

¹⁰⁸ 任繼愈編『中國藏書樓』（遼寧人民出版社2001年）p 128, p 308。

ではない点で疑問が残る。なお、同書の他の印記「子二子二永保用享」は、一説に明・文徵明（1470-1559）の長子、文彭（1498-1573）の蔵書印といい¹⁰⁹、また一説に蔵書印の「朱季子」で、『後編』のいう「朱家賓」ともいう¹¹⁰。

ここで幾つかの問題を提起することができる。まず、音辯本には45巻本と43巻本があり、前者は12行21字本的一种しか知られていないが、後者には12行21字本と13行23字本の二種がある。これら三種はいかなる関係になるのか、その先後関係はどうか。北図#10712と故宮#13833が共に『後編』Aであること、それと『後編』B北図#4977はいずれも12行21字本であり、幸いにも現存することが判明した。この他、私家蔵書の清・民国の著録で宋刻本と鑑定されているものはあるのか、根拠は何なの、その中に12行21字本は含まれているか、また今日に現存するのか。次号ではこれらについて見ていく。

(2013.8.30)

*本稿は平成25年（2013）科学研究費補助金（課題番号23520433）による研究成果の一部である。

¹⁰⁹ 王紹曾・崔国光等整理訂補『訂補海源閣書五種（上）』（齐鲁書社2002年）「後記」（p.1431）に「清白吏子孫」邊款題：“丙辰秋月作，雪漁。”明何震字雪漁，丙辰為嘉靖三十五年，且見於『楹書隅録』，為明代藏書家收藏印記。「子子孫孫永保用享」邊款識：“嘉靖丁未秋月作，文彭。”此二石作為海源閣藏印則可，作為海源閣藏書印記則大誤」といって海源閣楊紹和の蔵書印というが、丁延峰『海源閣藏書研究』（商務印書館2012年）「金石書畫帖硯」（p.205）では訂正されている。

¹¹⁰ 頼福順『清代天祿琳琅藏書印記研究』p.70。